



映画『能登デモクラシー』監督が 愛知で“選挙対談” 「民主主義の崩壊」に目を

愛知県弥富市での『能登デモクラシー』上映会に合わせてトークイベントに出演した五百旗頭幸男監督（右）とフリーライターの畠山理仁さん＝2月28日、筆者撮影

能登半島地震の被災地でもある石川県穴水町の町政を追ったドキュメンタリー映画『能登デモクラシー』の上映会が2月28日、愛知県弥富市で開かれた。それに合わせて上映会場で五百旗頭幸男監督と、全国各地の選挙を取材するフリーランスライターの畠山理仁さんによるトークイベントも開催。地方で「民主主義が壊れかかっている」現状の危機感を共有し、メディアや市民が目を向けるよう呼び掛けた。

◆「あのヤバい映画のヤバい監督が来た」と警戒される◆

上映会は弥富市民の有志が企画し、トークイベントは名古屋エリアのジャーナリストやカメラマンらで構成する一般社団法人なごやメディア研究会（なメ研）が主催した。

五百旗頭監督は富山県のチューリップテレビ時代に富山市議会の政務活動費問題を追ったドキュメンタリー『はりぼて』を手掛け、石川テレビに移ってからは石川県政の保守性を問題提起する『裸のムラ』を制作。『能登デモクラシー』はその流れを受け、人口7000人足らずの奥能登の穴水町で手書きの新聞を発行する元教師を追いながら、町長と町議会

の馴れ合いなどを描く。能登半島地震を経て昨年5月に全国で劇場公開され、大きな反響を巻き起こした。現在は各地で自主上映会が開かれている。

トークイベントで五百旗頭監督は、「前作の『裸のムラ』が馳知事の逆鱗に触れ、会見拒否問題に発展するなど全国的な話題になった。穴水に取材に入ると『あのヤバい映画のヤバい監督がこの町に来ている』と噂が広まってしまい、最初に考えていた当局の内側に入る撮影が難しくなり、市民側の目線で町の問題点をあぶり出していく手法に切り替えた」と明かした。